

『北海道 算数・数学の広場』1965年3月（東京書籍北海道支社）

プログラム学習の問題点

国立教育研究所 矢口 新

(1)

プログラム学習に対して、それはどこかで誰かがやっている一つの方式だと考えて、それをやってみようという態度で対するのは、あやまりである。まだそういうきまった方式はないのだと言った方が、本当は正しいのである。それなら、なぜそういう言葉があるのかということになるが、これは確かに矛盾である。

どんな場合でもそうであるが、何か従来とことなつたことをやろうとすれば、そのことを従来のものどちがつた言葉でよばなくてはならない。プログラム学習もそういう言葉の一つであるが、問題は、従来のことを反省しようということを行っているにすぎないのだということに自覚する必要がある。どう反省するのかといえば、従来のかきめあらい教育方法をもっときめ細かにすること、生徒一人一人の能力を開発することを考えるべきだということなどである。それからさき、どんな方式でどうするかは、まだこれから考えたらよいのである。その意味で、従来プログラムよりもっときめ細かにプログラムを考えるという言葉を使う。これがプログラム方式という言葉の使われる理由である。

(2)

従来の教育がきめあらい教育になっている根本原因は、教育の目標について、はっきりしたものがないからである。それは学習指導要領にはっきり出ているということを使うかも知れないが、実はその根底にある目標についての考え方がはっきりしないのである。この点は、日本の教育すべてに共通する所であるが、教育では、「わかる」ということが目

標だと考えられている。この「わかる」というのが、よくわからない言葉である。先生の話聞いてわかつたなどというが、それは何を意味するのだろう。「わかつたか、おぼえておけ」という言葉は実に多く使われる言葉であるが、それはどういうことだろう。そういう時間をつなげて行けば、能力が開発されるのだろうか。

能力かついたということは、自分で「できる」という状態になるということであろう。自分で「できる」という状態になるには、自分でやってみる、考えてみる、それをくりかえして行くこと以外にはないであろう。

現在の授業はそれを生徒にさせるようになっているであろうか。先生はそのつもりでやっていると言われるかも知れないが、果してそうであろうか。授業の場の構造がそうになっているかどうか。一斉授業のあり方、教科書のあり方、教師の活動のあり方、それらが、一人一人の生徒に、自分でやってみる、考えてみる、くりかえしてやってみるという場を与えるようになっているかということである。

(3)

プログラム方式とは、シートをつくって、それを生徒に与えることだというような形式ではない。そのシートが先生の通り一ぺんの説明を、ただ紙に書いたものになっているのでは大してかわりがないかも知れない。教育は人間がするものだから、紙に書いたものを渡してそれですますことはできないと考える先生が出て来るのも当然である。つまりこれは、従来のわからせるために説明するという方式を抜けないでいるからである。……もっともこの場合でも、

先生の話が大勢で聞いている時と、一人一人でペーパーを与えられて、自分で考えながら読ませられるのとは、どちらが効果があるかはしらべてみてよいことである。大勢で聞くと、どうしても無責任に聞いてしまうものである……

プログラム方式の根本のねらいは、生徒の一人一人の頭脳を訓練するという所にある。一人一人に考えさせ、くりかえしやらせ、最後に瞬間的にできるようにしてしまうということである。とって従来機械的な記憶訓練ではない。あくまで論理的な考え方の訓練だということである。

(4)

こういう考え方で、授業の場の構造を考えると、まず第一に教科書の革命が必要であろう。それは、内容的にも、形式の上からも言われる。教育内容の

現代化といわれることはこういうことである。考え方を積みあげることを中心にして、一度考え直す必要があり、それを生徒自らの頭脳訓練を通じてなしとげるためには、現在アメリカがやっているようなプログラムド・テキストにしなくてはならないであろう。

そういうものを使用すると、教師の活動の方式は全く変わって来るであろう。従来教師は、自分自身を授業の場のスターとして、どう活躍すべきかに浮身をやつしていた傾向があるが——少くとも結果においてそうになっていた——生徒一人一人を熟知するという活動にきりかわるであろう。その他生徒を活動させるため、教材教具の整備、そういうものにも革命的变化が来なくてはなるまい。